

---

# オモイノタネ 4

風紙文

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オモイノタネ 4

### 【Nコード】

N50860

### 【作者名】

風紙文

### 【あらすじ】

思いを込めて育てると、その人が欲したものが出来上がる不思議な植物の種子『発明の種』  
その発明を手に入れた少年は、自分をいじめた人たちに復讐を始めた。  
そして、最後の一人へと迫り……

(前書き)

あつてほしくない、けどあり得てしまつて出来事。  
今回はそんなお話

太陽の隠れて曇った日は、俺が一番元気な日だ。

街灯がついてなくて、真つ暗な時間は、俺が一番動く時間だ。

人気が少ない路地は、俺が一番好きな場所だ。

さよならは、俺が一番口にする言葉だ。

鬼ごっこって知ってるか？ 俺の人生はまさにそれだ。

俺はいわゆる、いじめられっこだった。とは言っても、最初からではない。

きっかけはまさに、鬼ごっこだったのだ。

ある学年の時、数人のいじめっこが一人のいじめられっこをいじめていた。

そこに俺は、いじめられっこの方に加勢して助けた。

その甲斐もあり、そいつはいじめられなくなった。

…それから暫くして、いじめっこ達の次の目標が決まったようだ。

それは俺だった。

そいつらのいじめは、前に比べて何故か意地悪の要領が良くなったような気がした。

その理由は、直ぐに分かった。

俺はある時に見つけたんだ。

そのいじめっこ組の中に、あの時のいじめられっこを。

…まさに鬼ごっこだ。

鬼に近づいたら、タッチされて、俺が鬼になったのだ。

ただ鬼以外が逃げるのではなく、襲ってくるというだけが大きな違いだった。

正直、それを見つけた時は心が折れた気がする。

せつかく助けた奴に裏切られたのだ。心が折れずにはられない…。

…復讐せずには、いられない。

そんな俺は、手に入れた。  
復讐の道具を、コレを使って、俺は奴らに復讐するんだ。  
これは鬼ごっこだ。

今は俺が鬼だから、他の奴らを抑まえるのさ。

まず始めにリーダー格を。

次に目のついた奴を、順番に曇りの日を待ちわびて。

暗く、人気のない路地に進ませ、捕まえた。

一人、また一人と、復讐は成功する。

その度に俺の中には…。

達成感と、体のダルさと

…罪悪感が、貯まっていった。

「…さよなら」

フツ

今もまた一人抑まえ…いや、消した。

さよなランプ

それがこの、復讐の道具の名前だ。

消したい相手を照らして明かりを吹き消すと消えてしまう

まさにぴったりじゃないか。復讐を誓う、抑まえる側の鬼には。

…しかし、一つ疑問がある。

消えた奴らは、何処に行ったのだろうか？

一人を消して学校に行く度、一人、また一人と生徒が消えている。

先生も理由が分からないからか、皆には何も告げず、ただの休み扱

いだ。

…何処へ消えたか、何処へ消してしまったか、それを考えるのは…。  
もう辞めた。

正直分らないし、一々それを考えてるようじゃ鬼は勤まらねえ。  
そう、俺は鬼だ。

捕まえる立場は、捕まえた奴のその後など知らなくてもいいのさ。  
…こんな考え方、人しては、最悪だな…。  
だがいいさ、俺は鬼だから…。

…なに、後…一人さ…。

幾日ぶりの曇り空。

俺は最後の一人を呼び出した。

「よう…久しぶりだな」

「な…何の用だい？」

「…分かってんだろ」

「ひい！」

腰を抜かして倒れやがった。

全く…俺は何でこんな奴を助けちゃまったんだろうな。

あれがなければ、俺は普通に暮らし、コイツはいじめられ続けた筈  
だったのにな。

「お前のせいで俺は…やりたくもない事をさせられたのさ」

「あ…あ…」

「あん時俺が助けなけりゃ、お前は今もあのままだったかもしれね  
えよな？」

「あ…あの時は別に助けてくれなんて言っていなかったじゃないか！  
？」

…は？

ダン！！

「ひい！」

近くにあつた電柱を蹴った。

「ふざけんじゃねえぞ！ テメエは助けてもらつておいて、そんなやり方しか出来ねのかよ！」

「き…君が他の皆をどうにかしたのは知ってるぞ！ は、早く皆を解放しろ！」

「うるせえ！」

ダン！！

「ひい！」

「テメエはやつぱりバカ野郎だ。やつぱあん時に、助けなけりや良かつたんだ。そうすりや俺はこんな事にならなかつた…」  
俺はランプを取り出した。

「な…なんだいそれは？」

多分だが…コイツも先に消した奴らと同じ所に行くんだろうな。そうしたら、またコイツはいじめられるのかもしれないな。

…ざまあ見やがれ。

「もうテメエと話す事なんてねえ…消えな」

ランプに火が灯り、アイツを照らした。

「な…なにをする…」

「…さよなら」

フッ

「な…」

アイツは消えてしまった。

息を吹き掛けて消えた。ランプの火のように。

「…う」

…なんだ？ クラツとした。

まるで貧血みたいだ。

「…その通りだから」

「誰だ？」

声のした後ろを振り向くと、眩しい光があった。

「くっ…」

手を前に出して光を遮りながら、声の主を見た。

見た目同じ年ぐらいの女だ。手には光源である懐中電灯を持って、この暗かった路地を照らしている。

「貴方のそれ…発明だよな」

「発明？」

確かにこのランプは「発明の種」とかいう物から出来上がった物だが…。

「…何で知ってやがる」

「私が発明を回収して回っているから」

正直答えになつてねえが…回収だと？

「回収してどうすんだ？」

「…分解する」

「分解だと？」

「発明は危険な物が多すぎる。だからこうして、回収している」

「……」

回収、か…。

「…いいぜ、持ってきたな」

俺はランプを投げ渡した。

「…良いの？」

「ああ…やるべき事はやり終えたしな。もう持っても役に立たねえ」

「そう…」

「それに、なんかそれを使う度に、妙に体がダルくなるんだ」

「…それは、ランプのデメリットだと思う」

「デメリット？」

「このランプの火をつけるのに使うのは…貴方の血」

「!!!」

俺の血液…？

「じゃあ何か？ 俺がそれを使い続けたら、いつか死ぬかもしれないって事か？」

「多分」

…恐ろしい発明じゃねえか

「…手放して良かったって事か？」

「かもしれないし…違つかもしれない、それを決めるのは、これからの貴方の行動次第」

懐中電灯の光が消えた。

「…でも、一つだけ言えるのは」

暗さの戻った闇の中に、そいつは去って行った。

こんな言葉を残して、

「…終わらないものは、この世には存在しない」

その翌日…。

俺が消した奴らが帰ってきた。

何処へ行ったか聞いても、誰に何をされたか聞いても、答えられる奴はいなかった。

その後の奴らは、いじめを辞めた。

俺も狙われる事なく、その後の学校生活を楽しむ事が出来た。

…やはりこれは、鬼ごっこだったんだ。

いくら鬼になったとしても、鬼ごっこは遊びだ。

所詮は遊び、いずれ終わるって事だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5086o/>

---

オモイノタネ 4

2010年10月25日16時12分発行